

梅若会定式能

能朝

長

松山 隆雄

川口 晃平
小田切亮磨



狂言 茶

壺

野村

萬

野村虎之介
野村 万蔵

能熊

野

梅若 紀彰

讀繼之伝 山中 迺晶
村雨留



平成二十八年四月十七日(日)

午後一時開演(正午開場)

梅若能楽学院会館

自由席 七、〇〇〇円

朝長 川口 晃平
小田切亮磨
松山 隆雄

森 常好

國川 純
大川 典良
森澤 勇司
栗林 祐輔

間能村 晶人

後見 松山 隆之
小田切康陽

地謡

土田 英貴 井上 療治
角当 直隆 角当 行雄
山崎 正道 梅若 玄祥
井上 和幸 山本 博通

狂言 茶壺

野村 萬

野村虎之介
野村 万蔵

仕舞

八隅 養田

老島 刈川 栖

小田切康陽
鷹尾 維教
角当 直隆
井上 和幸
山本 博通

山崎 友正
鷹尾 章弘
角当 行雄
会田 昇
梅若雄一郎

《休憩十五分予定》

山中 近晶
梅若 紀彰
野 読継之伝
村雨留

館田 善博

幸 清次郎

藤田 貴寛

後見

川口 晃平
梅若長左衛門

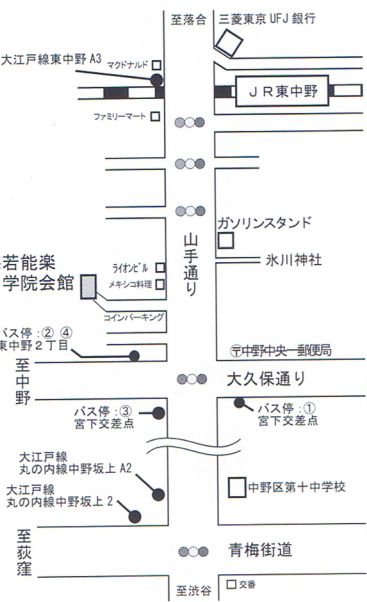
地謡

梅津千代司
土田 英貴
松山 隆之
山崎 正道
鷹尾 章弘
会田 昇
鷹尾 維教

『朝長』〜ともなが〜嵯峨清涼寺の僧は、平治の乱で自殺した源朝長と縁が深く、朝長の霊を弔うために美濃の青墓の宿を訪れる。朝長の墓前には、供を連れた青墓の宿の女主人が涙を流していたので僧が声をかける。すると女は「平治の乱で源義朝一行が自分の宿に泊まった時、義朝の次男・朝長は都から敗走の途中で膝を射られて重傷を負っていた。朝長は一行の足手まといになることを懸念し、犬死にするよりはと夜更けに腹を切り短い生涯を終えた。」と僧に朝長の最期を物語る。女は僧に朝長の霊の回向を勧め、自分の宿へと伴う。朝長が生前に尊んだ観音懺法を僧が読経すると、朝長の霊が幻のように現れる。朝長の霊は兄・義平、弟・頼朝が敵の捕虜になり、父・義朝は頼りにしていた家臣の長田に討ち取られた一門の不運を語り、そして女ながらに自分達を親身に世話し死後の弔いも続けてくれる宿の主人に感謝をする。朝長の霊は今の修羅道での苦しみを語ると、僧になおの回向を頼みながら姿を消す。

『熊野』〜ゆや〜平宗盛の側で仕える遠江池田の熊野は都住まいが続く。熊野は遠江の老母の看病の為に宗盛に暇乞いを申し出るが許されない。ある日故郷より侍女の朝顔が母の容態が良くないという文を届けに来る。熊野はその手紙を宗盛に示すが帰郷は許されない。宗盛の花見の為に東山に供をする熊野は、満開の花の中でも気持ちは沈み、六波羅密寺の地藏堂や清水寺では一心に病母を思い祈る。やがて酒宴となり熊野はしぶしぶ舞を舞う。折しもの村雨に花が散りかかるのを見て熊野は母の命が思いやられる気持ち涙ながらに短冊に綴り宗盛にさします。これに心をうたれた宗盛は帰郷を許し、さっそく熊野は遠江へと帰って行く。

- ＜JR線＞
・総武線・東中野駅西口 徒歩8分
- ＜地下鉄＞
・大江戸線 東中野駅 A3出口
・大江戸線 中野坂上駅 A2・2出口
・丸の内線 中野坂上駅 A2・2出口
いずれも徒歩8分
- ＜バス＞
①関東バス（宿05：中野駅経由）
新宿西口→野方行 宮下交差点下車
- ②関東バス（宿05：中野駅経由）
野方→新宿西口行 東中野2丁目下車
- ③京王バス（洪64：中野坂上経由）
渋谷→中野駅南口行 宮下交差点下車
- ④京王バス（洪64：中野坂上経由）
中野南口→渋谷行 東中野2丁目下車
- *当会館は駐車場はございません。
ご来場の際は電車、バス等をご利用下さい。



〒164-0003 東京都中野区東中野 2-6-14
公益財団法人 梅若会 (梅若能楽学院会館)
TEL : 03-3363-7748 FAX : 03-3363-7749

【観能チケットについて】

- 自由席 7,000円 指定席 8,000円 学生席 3,000円
- 賛助会員券 (定式能) および自由席をお持ちの方は 1,000円プラスで正面のご希望のお席を確保いたします。公演1週間前までにお電話にてご予約下さい。準賛助会員券 (梅流会) をお持ちの方は 1,000円プラスで自由席にてご観能可能です。
- チケットはお電話、またはファクスにて郵便番号、ご住所、お名前、ご連絡先電話番号、ご希望席種をお書きの上お申し込み下さい。TEL 03-3363-7748 FAX 03-3363-7749) なお梅若会ブログにても受け付けております。(パソコン: <http://umewakanoh.exblog.jp/> 携帯: <http://mblog.excite.co.jp/user/umewakanoh/>) 詳しくはお電話にてお問い合わせ頂るか梅若会ブログをご覧ください。
- 都合により出演者、曲目に変更がある場合がございます。
*ロビーにて軽食、コーヒー、ケーキ等の販売がございます。皆様ご利用下さい。



梅若会定式能 平成 28 年 4 月 17 日 (日)

ともなが
能 『朝長』

朝長は父・義朝一行をかくまってくれ、また自分が自害した後、今も弔ってくれている青墓の宿の長（前シテ）の母親のような温かい心に恩を感じ感謝するのです。が一方、源氏の敗戦と自害の時のあの修羅道の苦しみをうったえ供養を頼むのです。

能 「朝長」 前シテ（青墓の宿ノ長者）・後シテ（源朝長ノ霊） 松山 隆雄
ワキ （旅僧・もと朝長ノめのと） 森 常好

□あらすじ

嵯峨清涼寺の僧は、平治の乱で自害した源朝長と縁が深く、朝長の霊を弔うために美濃の青墓の宿を訪れる。朝長の墓前には、供を連れた青墓の宿の女主人が涙を流していたので僧が声をかける。すると女は「平治の乱で源義朝一行が自分の宿に泊まった時、義朝の次男・朝長は都から敗走の途中で膝を射られて重症を負っていた。朝長は一行の足手まといになることを懸念し、犬死するよりはと夜更けに腹を切り短い生涯を終えた。」と僧に朝長の最後を物語る。女は僧に朝長の霊の回向を勧め、自分の宿へと伴う。朝長が生前尊んだ観音懺法を僧が読経すると、朝長の霊が幻のように現れる。朝長の霊は兄・義平、弟・頼朝が敵の捕虜になり、父・義朝は頼りにしていた家臣の長田に討ち取られた一門の不運を語り、そして女ながらに自分達を親身に世話し死後の弔いも続けてくれる宿の主人に感謝する。朝長の霊は今の修羅道での苦しみを語ると、僧になおの回向を頼みながら姿を消す。

□見所・聞き所

能ではまれに見る、若武者の内面的観点を描いた曲です。

地謡（地頭・玄祥師）の妙味もご堪能ください。

・三修羅と呼ばれる曲 — 「実盛」^{さねもり}（老武者）、「頼政」^{よりまさ}（老武者）、「朝長」^{ともなが}（若武者）

・「長」とは宿場の遊女宿の統率者

他に 能 「熊野」 シテ 梅若 紀彰 ワキ 舘田 善博

仕舞「養老」小田切康陽 「八島」鷹尾維教 「隅田川」角当直隆
「芦刈」井上和幸 「国栖」山本博通

狂言「茶壺」野村 萬